

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 柴田晋吾

本論文は、森林の多元的価値実現及び国際的・地球規模の観点から、文献レビューを中心に、主として歴史・制度・生態系面から比較論的に「持続可能な森林環境資源の管理経営のあり方」について総合的考察を加え、その基礎的理念を整理すると共に、その実現のための政策手法と森林保全・利用の方向を明らかにすることを目的としたものである。その内容は、以下の四つに大別される。

1) 「持続可能な森林環境資源の管理経営」の考え方の台頭に至る歴史的経緯

まず、欧米の主要先進国における 20 世紀後半の環境保護サイドと森林・林業政策の動きの両面に関して対比、分析を行い、60-70 年代及び 80 年代後半以降における環境保護と木材生産との対立・論争が、従来の「木材生産を中心にした政策」から「森林環境資源の有する幅広い価値に視点を当てる政策」への転換の引き金となっていること、その政策転換の過程や論争の内容・時期等に関しては社会状況、資源内容、所有形態などの違いに応じて差があること、また、フォレスターの環境保護 NGO への対応姿勢は、無視、反論等から次第に傾聴、共働の方向へと変化しつつあることを明らかにした。

次に、それぞれ欧州及びアメリカで台頭してきている "Close-To Nature Forestry" (CTNF、自然に近い林業) と "Ecosystem Management" (EM、エコシステムマネジメント) の思想とその歴史的経緯を分析し、CTNF は 1922 年に Möller が唱えた "Dauerwaldgedanke" (恒続林思想) に端を発していること、他方 EM は、思想的には Muir の厳正保存や Pinchot の利用推進型保全、また Multiple-Use (多目的利用) と一線を画する考え方であり、20 世紀前半に Leopold が唱えた自然との共生を目指す保全思想に近いことを明らかにした。

2) 「持続可能な森林環境資源の管理経営」の基礎的理念についての分析、整理

まず、アメリカの「内陸コロンビア水系エコシステムマネジメントプロジェクト (ICBEMP)」の事例分析を行い、生態系の持続を示す指標として、基本的には "Ecological Integrity" (EI、生態的統合度) と "Socioeconomic Resiliency" (SER、社会経済的弾性度) が用いられていること、またその他に、"Historical Ranges of Variability" (HRV、歴史的変動範囲) 等の概念が提示されているが、これらの指標、概念の政策手段としての活用を可能にすることが今後の課題であるということを指摘している。

次いで、森林に対する人為を「都市型開発」、「農業型開発」(以上が林地開発)、一斉植林型の「開発型保全」、原生的森林の保全の「非開発型保全」、及びこれらの中間の「中間型保全」(以上が森林保全) の五つに区分し、歴史的・経験的事実などに基づき各クラスターにおいて特に期待される価値・利用間の両立可能性のマトリックスを作成した。その結果、各種保全活動と、各種木材生産活動との間の両立可能性・困難性の関係が明確になり、古くから存在する楽観的な「予定調和論」にはおのずから限界があることが示された。そして、「予定調和」に代わって生態系の持続の範囲内で計画的に多様な価値のバランスを追求する「計画調和」という新たな理念を提示した。

3) 新たな理念の実現のための政策手法の分析

まず、「計画調和」の理念の実現を図るための手段として、伝統的な"participation" (参加) とは一線を画する"collaborative management" (CM、共働型管理) の概念が有効であることと、その問題点、たとえば住民への過度の委譲によるコントロールの喪失や財政的、政策的支援の欠如などが指摘されている。次いで、「計画調和」を目指した CM の事例であると考えられるアメリカ、カナダにおける"strategic level" (戦略レベル) の森林土地利用計画の策定について多角的な観点から比較考察を行い、実質的な CM への転換と生態系の持続のための科学的知見の強化が必要であること、及び戦略レベルの森林計画は実行指針としての成果物から民主的な政策形成過程へと変質しつつあることを明らかにした。

4) 森林の保全・利用の方向の提示

地球規模の生態系の持続の観点から EI 及び SER の双方の確保を図るためには、原生的森林と一斉植林地の中間の森林(「中間森林」と呼ぶ)の保全(「中間型保全」)が特に重要であること、さらに、そのための森林保全・利用の方向として、「中間森林」を中心的な対象として森林の全ての産物、サービスに視点を当てた統合型森林環境経営である"holistic forestry" (森林業)への展開を提示している。

以上、本論文は、森林の多元的価値実現の立場から、持続可能な森林環境資源管理経営に関して、基礎理念、政策手法、保全・利用方向の三つの観点から総合的に論じたもので、これからの森林環境資源管理経営の研究及び実践に多大の貢献をなすものと考えられる。よって、審査委員一同は、本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。